



Title	英語の輕動詞構文研究の進展と課題（1）
Author(s)	小薬, 哲哉
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 43-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102195
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

英語の軽動詞構文研究の進展と課題（１）

小栗 哲哉*

キーワード：軽動詞構文、動詞中心的アプローチ、名詞中心的アプローチ

1 はじめに

英語には、軽動詞構文 (light verb construction) と呼ばれる (1) のような表現がある。

- (1) a. Here, *have a look* at this.
b. *Take a look* at these figures!
c. Make sure you *get a good look* at their faces.

(Oxford Learner's Dictionaries, 強調は筆者)

(1) の動詞 *have*, *take*, *get* は、目的語に不定冠詞と動詞の不定形と同形をとる。Jespersen (1942: 117) は「軽動詞」(light verb) と呼んだ。このような構文は日本語をはじめとする他の言語でも見られ、従来から多くの研究が積み重ねられてきた。

本稿の目的は、英語の軽動詞構文に関する先行研究を俯瞰し、その要点と課題を概観することで、今後の研究がとるべき方向性を探ることである。本稿の構成は、以下の通りである。2 節で、英語の「軽動詞構文」に関する従来の研究を概観し、構文一般の基本的特徴を順に検討する。3 節では、先行研究での観察を踏まえ、様々な軽動詞がどのような意味の名詞類と共起するのかを考察し、各軽動詞の構文的意味を概観する。4 節では、Jespersen (1942) に代表される伝統文法の考え方とは対照的に、軽動詞も構文の解釈に意味的に貢献していると考え近年の研究を概観し、その課題を述べる。最後の 5 節で本稿の議論をまとめる。なお、筆者が考えるその課題の解決策については、別稿にて論じることとする。

* 本稿は、Kogusuri (2024a, 2024b)、小栗 (2024b)、小栗 (2025) の内容を一部含む。これらの成果をまとめるにあたって貴重なご指摘、コメントをいただいた全ての方に心より感謝申し上げます。本研究は、JSPS 科研費 22K00508 および 25K04041 の助成を受けている。

2 軽動詞構文の基本的特徴

現代言語学における英語の軽動詞構文研究の重要なものとして、Live (1974), Wierzbicka (1982), Cattell (1984), Dixon (1991/2005), 相沢 (1999), Kearns (1988/2002) が挙げられる。以下では、これらを含む先行研究を概観しながら、次の二点を検討する。まず、本節では、軽動詞構文一般が、どのような形式的・意味的特徴をもつ構文であるのかについて考察する。続く3節で、軽動詞構文がどのような意味を表し得るのか、4つの軽動詞を取り上げ、共起する名詞の意味タイプを検討した研究を概観する。

2.1 意味的に「軽い」動詞

英語の軽動詞構文の重要な特徴の一つとして、これまでも何度か触れた、動詞の意味的「軽さ」が挙げられる。Jespersen (1942) は、意味が「軽い」動詞の後に、行為を表す名詞が来るとしており、さらにこの動詞が「取るに足りない動詞」(an insignificant verb) であると表現している¹。Poutsma (1926: 394-395) では、(2) の例を挙げ、これらの主動詞がはっきりとした意味を持たないこと、対照的に、目的語名詞の方が具体的行為を表し、述語として重要な役割を担うことを指摘している²。

- (2) {give / make} {an answer / a reply}, make a call, {give / raise / set up / utter} a cry,
 {drop / make} a curtsy, {make / give} a promise, {make / pay} a visit, give my friend
 a call

Cattell (1984: 2) でも、軽動詞が「構文の意味解釈にはほとんど貢献していない」と明確に述べている³。

別の見方をすれば、軽動詞はその語彙的意味が薄れ、意味的に漂白 (bleached) を起こしており (岸本 2001: 131, Butt and Lahiri 2013 など)、実質的にはどの軽動詞も同じような意味機能を有していると考えられるかもしれない。例えば、{have / take / make /

¹ “... the general tendency of ModE to place an insignificant verb, to which the marks of person and tense are attached, before the really important idea ...” (Jespersen 1942: 117)

² Poutsma (1926) は、さらに動詞が連結詞 (connective) の役割を担うとまで述べているが、しかし、そのように言い切ってしまうとよいかは疑問である。

³ “... the words make, give, have, take, and do seem semantically very ‘light’ (to use a term coined by Jespersen), and to mean very little more than that a verbal action occurred. This action is spelt out in the nominal that follows.” (Cattell 1984: 2, 強調は筆者)

give} a guess という表現は、いずれも「推測する」(guess) という意味を表す点で類似している (Live 1974: 33)⁴。動詞が異なっても互いに類義的であるという事実は、軽動詞が意味的に漂白し、実質的機能が同じであるという考えを支持するように思われる。

ただし、どの動詞が選択されるのか、相互にどういった違いがあるのかについては、先行研究でも指摘されているように、目的語名詞の意味クラスによる (イディオム・コロケーションとしての) 選好性や、イギリス英語 (やオーストラリア英語) とアメリカ英語のような方言 (dialect) による差異も関係する。

2.2 繰り返すことのできる不特定の行為を表す名詞

Wierzbicka (1982)、Dixon (1991/2005)、影山 (1996: 77-82) によれば、軽動詞の目的語には、繰り返すことのできる不特定の行為を表す名詞が立つという。例えば、(3) のように arrive や break のような、特定の方向づけのある位置変化・状態変化を表す表現は生起できないとされる。

- (3) a. * John had an arrive (from town before breakfast). (Dixon 2005: 67)
b. * John gave the door break. (Dixon 2005: 67)

これらは、時間の経過とともに方向性を持って展開する事態であり、意図された特定の状態を完結点 (telos) とする位置変化・状態変化である。気軽に何度も繰り返すことができるような不特定の行為とはみなせない。つまり、have a V 構文は非完結的な事態を表すという制約が課される (Wierzbicka 1982: 759, 776)。これに関連して、次の例のように、行為の対象が有限であったり、着点句をつけて目的を持った特定の地点への移動を表したりする場合、非文となることが指摘されている (Wierzbicka 1982: 776、相沢 1999: 63 など)。

- (4) a. * John had a drink of a litre of water. (Wierzbicka 1982: 776)
(cf. John drank a litre of water.)
b. * I'll have a walk to the post office. (相沢 1999: 63)

⁴ ただし、give a guess は他の表現よりもやや稀な表現と考えられる。

(cf. I'll wak to the post office.)

これらの例の非容認性は、対応する単純動詞文のものとは対照的である。

上の観察を踏まえると、軽動詞構文の目的語名詞には、活動述語や単一相 (semelfactive) 述語が生起するのではないか、と考えられるだろう。実際、影山 (1996) では、目的語位置には ACT や ACT ON で表されるような働きかけを表す名詞が生起し、ACT を表す場合には have が、ACT ON を表す場合には give の二重他動詞用法 (二重目的語構文) が選択されると主張している。

しかしながら、(5) の例を見ると、名詞が何らかの不特定の「行為」を表すという観察が一般的な傾向に過ぎないことが分かる (斜字体は筆者による)。

- (5) a. Carlos prodded his steak with his knife; *made a cut* but didn't eat. (COCA, 2015 FIC)
b. Do you want to *have a bite* of cake? (COCA, 2018 MOV)
c. Anna *gave* the room *a clean-up* before her mother arrived. (Stein 1991: 10)

(5a) や (5b)、(5c) の斜字体の表現は、対象の状態変化を表す表現である。ただし、これらは対象全体の状態変化というよりもその一部に対する変化であると捉えられる。具体的に言うと、(5a) ではステーキの一部を切ることを、(5b) ではケーキの一部をかじることを、(5c) では部屋の一部 (ベッドや床など、日々使う範囲の空間) を意味する。対象全体の影響が含意されず、部分的な影響にとどまる事態であるとすれば、繰り返し可能な行為としての側面が焦点化されていると捉えられるだろう⁵。

目的語名詞には、実際にどのような意味的制約が課せられているかについて、今後さらに検討される必要はあるが、いずれせによ軽動詞構文で、対応する単純動詞文にはない制約・制限が生じていることは確かである。

2.3 不定冠詞付き単数形名詞への偏り

軽動詞構文において、目的語名詞には基本的に不定冠詞がつかなければならない。

⁵ 関連して、Wierzbicka (1982: 771) では have a bite、have a chew のような表現について、物をかじったり、噛み砕いたりすることは無視できるような変化とみなせる (this change [involved by biting or chewing] can be dismissed as negligible) と述べている。

とくに、ゼロ派生 (zero derivation) あるいは転換 (conversion) と呼ばれる形態論的操作で派生される名詞は、この傾向が強い。例えば、Dixon (2005: 463) が指摘するように、ゼロ派生名詞である look は、軽動詞構文において定冠詞と共起できない。

(6) a. I {had / took} a look in the suitcase.

b. *I {had / took} the look in the suitcase. (Dixon 2005: 463)

複数形に関しても同様で、Live (1974: 40) は、He took {a look / a plunge / a pledge} に対して He took {looks / plunges / pledges} がほぼ容認されないと指摘している。

Wierzbicka (1982: 759-760) によると、名詞に先行する不定冠詞が、動詞が表す出来事を有界化かつ単数化する効果 (a delimiting and singularizing effect) をもたらすと指摘する。つまり、不定冠詞によって、有界的でまとまりのある、繰り返し可能な行為として解釈することが構文的に要求されるということである。

しかし、この不定冠詞付き単数形名詞への偏りも、全ての名詞に厳格に課される特徴ではなく、ゼロ派生名詞に多く見られる一般的傾向に過ぎない。以下のように、接辞付き派生名詞では無冠詞や定冠詞の事例が観察される。

(7) a. We took exception to his remarks. (相沢 1999: 84)

b. ... but he was actually fourteen years younger and *made the discovery* of natural selection twenty years later than Darwin. (COCA, 2015 MAG)

また、Jespersen (1942) や相沢 (1999) が列挙しているように、ゼロ派生名詞であっても、無冠詞や定冠詞の例が見られる (以下の一部には、無冠詞複数形の例も含まれる)。

(8) a. give someone the chuck, give each other the cut, give someone the slip, {give / get} the

push, have the pull of, {have / get} the bulge on, put someone to the blush

(Jespersen 1942: 118)

b. take alarm, take notice, take offense, take root, have control, have doubt, have respect, have regrets, give advice, give chase, give help, make contact, make haste, make

ここで重要な情報を 2 点補足しておきたい。まず、ゼロ派生名詞と接辞付き派生名詞の違いに関して。相沢 (1999: 22) は、ゼロ派生名詞は基体動詞の意味に近く、身体動作などを表す日常的語彙として口語的文体が多いとし、軽動詞 *give, have, take* との結合が多いと指摘する。これに対して、接辞付き派生名詞はラテン語系の語が多く、抽象概念、出来事、行為の結果生じたものなどを指す。これらは、軽動詞 *make* との結合が多く、意味内容から学術書、説明文などで使われると指摘している。ゼロ派生名詞と接辞付き派生名詞の構文的特徴の違いは、2.5 節で見る「統語的固定性」とも連動している。

2 点目として、Wierzbicka (1982) や Dixon (1991/2005) は「軽動詞構文」のカテゴリーに接辞付き派生名詞の例や無冠詞・定冠詞の例を含めておらず、軽動詞構文を「*have / take / give a (V)* 構文」として限定的に捉えている。このように考察対象を限定することは、多様なデータを観察しやすくするという理由から、研究手法の一つとして有効であろう。しかし、(7) や (8) も名詞 (の基体動詞) の意味が文の解釈に深く関わっており、動詞と目的語名詞の意味合成という観点からすると、これらの名詞の例も軽動詞構文に含めるべきだと筆者は考える。

2.4 アスペクト特性

Wierzbicka (1982: 757-758) によると、軽動詞構文と単純動詞文が大きな異なる点の 1 つとして、アスペクトに関する違いがあるという。軽動詞構文が表す出来事は有界的、すなわち時間的に限りのある出来事であり、比較的短めの時間幅で展開すると想定される。例えば、10 時間泳ぐ場合に *have a swim* とは言いにくいだろうと Wierzbicka (1982: 757) は述べている。また、(9) の *long* があることで長時間の行為を表すことになり、容認されないとしている。

(9) * He had {a long swim in his tiny pool / a long walk in his 10-by-12 cell}.

(Wierzbicka 1982:757)

Norvig and Lakoff (1987: 204) でも *take a stare* を例に、それが容認されないのは、軽動

(10) He gave a scream. / He screamed. (Bruening 2016: 54)

(11) a. [...] *could you **just** give me a ring* and say it's done [...]
 b. you *ought to give it **a little bit of** thought* before you actually put the thing ...

(Martínez Caro and Arús-Hita 2020: 300)

ただし、上で見たようなアスペクト的意味の特徴が、軽動詞構文においてどの程度、どの表現に当てはまるかについては、検証が必要であろう。というのも、(12) のように長時間を表す *long* が使われる例が実際には観察されること、また、Brugman (2001: 566) において *take a good long look* が容認可能であると述べられており、軽動詞構文が必ずしも「時間的に限りのある、比較的短めの時間幅で展開する出来事」を表すとは限らないことが分かる。

(12) Again I raised the glass [...] and *had a long look* at the animal.
(James W. Schultz, *Why Gone Those Times?: Blackfoot Tales*, 強調は筆者)

49

Dixon (1991/2005) は、軽動詞構文が受動化できないと述べ、軽動詞用法と本動詞用法には明確な違いがあると主張している。

(13) a. * A swim (in the pool) was had/taken.

b. * A push was given Mary.

(Dixon 2005: 468)

一方で、Live (1974: 37-38) では、他動性の低い have を除いて、take, give, make などの軽動詞は、ほとんどの接辞付き派生名詞とで受動化可能だとしている。また、ゼロ派生名詞についても、基体動詞が自動詞のものは受動化しにくいとして Dixon の指摘と合致するが、さらに基体動詞が他動詞のものは受動化するものが多いと述べている。

相沢 (1999: 183-190) は、Live (1974) のこの主張に反例があることを指摘した上で、受動化しやすい名詞として、「身体動作以外のもの」を指す場合だと主張する。確かに、(13) の Dixon が挙げる容認されない例は身体動作に該当しているし、様々な文献で受動化が非文となる証拠として出される例も、身体動作を表す目的語名詞が多いように見受けられる。さらに、相沢 (1999: 187) は独自に収集した資料において、軽動詞構文が受動態で用いられている例の割合を挙げており、make (134 例、77%)、give (31 例、18%)、take (8 例、5%)、have (0 例) というデータを示している。そして、make の受動化の例が最も多いのは、make と共起する目的語名詞は、身体動作以外の抽象的な出来事・概念を表すものが多いこと、さらに make が用いられやすい学術論文では、能動文の主語を明示することを避け、受動態が好まれる傾向にあることも要因として挙げている。

Kearns (1988/2002: 2-3) では、以下の統語的な診断テストに基づいて、軽動詞が統語的な操作の適用を受けない「真性軽動詞」(True Light Verb) とそれが可能な「擬似軽動詞」(Vague Action Verbs) に分けられると分析する。

(14) a. 受動化：

* A groan was given by the man on the right.

A demonstration of the new equipment will be given on Monday.

b. WH 移動：

* Which groan did John give the rope?

Which explanation did the second witness give for the delay?

c. 代名詞化 :

?? The deceased gave a groan at around midnight, and gave another one just after two.

If you can give a presentation after lunch, I'll give {one/mine} after yours.

d. 定性制限 :

* Who gave the groan just now?

The representative who gave the demonstration left his card.

(Kearns 1988/2002: 2-3)

(14) の対比が示すように、同じ動詞 *give* であっても、後続する目的語名詞によって統語的振る舞いが異なることが分かる。特に、2.3 節で触れた名詞の定性による容認性の違いが、(14d) における真性軽動詞と擬似軽動詞の違いとして示されている点は興味深い。

さらに日高 (2007, 2023) では、*give a shout* を例に、*a shout* の解釈が出来事 (15a) か、産物 (15b) かによっても、その統語的振る舞いが異なると指摘している。

(15) a. A sudden shout was given by John.

* Which sudden shout did John give?

? John gave a sudden shout, and Mary gave one, too.

* John gave the sudden shout.

b A loud shout was given by John.

Which loud shout did John give?

John gave a loud shout, and Mary gave a louder one.

John gave that loud shout.

(日高 2023: 239)

ただし、日高 (2007, 2023) は、個人あるいは個人の中でも、これらの文の容認性判断にゆれが生じることを認めている (相沢 1999: 189-190 にも同様の指摘がある)。

以上、軽動詞構文における目的語名詞の統語的固定性は、次のようにまとめられる。

まず、(14) のような統語的振る舞いの差異は、軽動詞構文に二つの下位構文を認める根拠とみなすことができる。また、ゼロ派生名詞と派生名詞、および各軽動詞間でも統語的振る舞いの傾向に差が存在することも、異なる構文を仮定することを支持する。しかし、こうした統語的固定性は、語彙によって、また (15) のように解釈によっても、そして話者によっても容認性判断に揺れがあり、従って、絶対的な診断基準として信頼することは難しいと言わざるを得ない。

2.6 目的語名詞の動詞性

軽動詞の目的語として生起する名詞は、上述の通り、動詞からのゼロ派生のものと接辞付加したものに分かれる。また、両者は受動化できるかどうかなど、文の構造や他動性に関しても異なる特徴をもつ傾向にある。特にゼロ派生名詞を目的語とするものは、他動性が低く、統語的に固定した特徴を持つことを見た。

これはいわば、軽動詞と名詞が一つの複雑述語 (*complex predicate*) として分かち難いほどに密接に結びついていることの証左と考えることができる。この場合、目的語名詞は、複雑述語の一つの要素としては基体動詞の特徴を色濃く受け継いでいることが窺える。例えば、次の *think*、*choose*、*carry* は、軽動詞構文でしか存在しないゼロ派生名詞とされる (Kilby 1984: 117, Wierzbicka 1982: 755 fn. 3, Dixon 2005: 465)。

- (16) a. I'll have a think about it. (Kilby 1984: 117)
b. I want you to have a choose. (Wierzbicka 1982: 755)
c. John gave the baby a carry. (Dixon 2005: 465)

別の言い方をすれば、軽動詞構文は、動詞用法しかない語を例外的（あるいは臨時的）に名詞として使い、一種の複雑述語を形成する構文と特徴づけられる⁶。

目的語名詞がより動詞的であることを示す第二の証拠は、目的語名詞の発音が動詞と同じものがあるという Wierzbicka (1982: 792, fn.3) による観察である。May I have a

⁶ これとは異なるケースであるが、相沢 (1999: 24) は、ゼロ派生名詞も接辞付き派生名詞も、軽動詞構文での意味が、元の基体動詞と関連していても実際は異なる場合があると指摘している。例えば、*have a rage for* 「夢中になる」の名詞 *rage* は、動詞 *rage* 「激怒する」と全く意味が異なる。*take pleasure in* 「楽しむ」の *pleasure* も、基体動詞 *please* の「楽しませる」とは意味的に一致しない。これも、軽動詞と派生名詞が一つの複雑述語として密接に結びついている証左と見なせるかもしれない。

use of your pen for a moment? という文において、use は名詞としての /ju:s/ ではなく、動詞と同じ /ju:z/ であるという。

さらに、第三の証拠として、目的語の名詞を修飾する形容詞が基体動詞を修飾する副詞に意味的に対応するという点である。

(17) a. I had a brief sit-down. = I sat down briefly.

b. I had a long walk. = I walked for a long distance/ for a long while.

(Dixon 2005: 464, 一部改変)

ただし、Dixon (2005: 465) が触れているように、have a quick whiskey (= drink whiskey quickly) のような典型的な名詞を修飾する形容詞も副詞的に解釈できる。形容詞修飾と副詞修飾との意味的な対応関係が、目的語の動詞性の高さを示す証拠とは必ずしも言えない可能性がある（4 節の議論も参照）。それでも、have と a quick whiskey が意味的に密接な結びつきをもつことが示唆される⁷。

3 目的語名詞の意味タイプと軽動詞の意味

次に、英語の軽動詞構文がどのような意味を表し得るのか、特に、軽動詞と共起する目的語名詞の意味タイプを先行研究の成果に基づいて検討する。先行研究で構文的意味を考察する場合に多いのが、have、take、give、make など何か特定の動詞を取り上げて、それがどのような意味の名詞と共起するのかを記述するものである。

例えば、Wierzbicka (1982) は、動詞 have が生起する軽動詞構文を取り上げて「have a V 構文」と呼び、それが表す意味について詳細に検討している。考察では have a V 構文が have のスキーマ的意味を共有しながら、(18) のように 10 の意味に分類できることを指摘している。(18) ではそれぞれの意味とともに容認可能な例と容認不可能な例を引用する（太字による強調は筆者による）。なお、容認不可能な表現には Wierzbicka (1982) の文例を一部改変し、語句の形で抜き出したものが含まれる。

(18) a. AIMLESS OBJECTLESS INDIVIDUAL **ACTIVITY** WHICH COULD CAUSE ONE

⁷ Dixon (2005: 465) は、have a quick whiskey を have a quick drink との混成 (blend) と述べており、軽動詞構文も同様に特別な結びつきを示す構文と捉えているようである。

TO FEEL GOOD:

have {a walk / a swim / a run / a jog / a lie-down}

(cf. **have {a get-up / a turn-around}*) (Wierzbicka 1982: 762)

- b. ACTION AIMING AT **PERCEPTION** WHICH COULD CAUSE ONE TO KNOW SOMETHING AND WHICH WOULD NOT CAUSE ONE TO FEEL BAD IF IT DIDN'T

have {a look (at) / a listen (to) / a smell (of) / a feel (of) / a taste (of)}

(cf. **have {a watch of something / an observe of something / an inspect of something}*)
(Wierzbicka 1982: 763-764)

- c. TENTATIVE ACTION WHICH COULD CAUSE ONE TO **COME TO KNOW SOMETHING** AND WHICH WOULD NOT CAUSE ONE TO FEEL BAD IF IT DIDN'T

have {a try / a look (for) / a think (about)}

(cf. **have {an attempt / a succeed / a find of something / a decide}*)
(Wierzbicka 1982: 766-768)

- d. **SEMI-VOLUNTARY ACTION** WHICH COULD CAUSE ONE TO FEEL BETTER
- have {a cough / a yawn / a cry / a vomit}* (Wierzbicka 1982: 769)

- e. **CONSUMPTION OF SMALL PARTS OF OBJECTS** WHICH COULD CAUSE ONE TO FEEL PLEASURE

have {a bite / a lick / a suck / a chew / a nibble}

(cf. **have {a dust of the furniture / a trim of the bushes / a scratch of the ground}*)
(Wierzbicka 1982: 771)

- f. **CONSUMPTION OF NON-DISCRETE SUBSTANCES** WHICH COULD CAUSE ONE TO FEEL PLEASURE

have {a drink of (orange juice) / a smoke / a drag (from) / a puff / a sip of (wine) / a sniff of (petrol)} (Wierzbicka 1982: 774-775)

- g. **ACTIVITY SUPERFICIALLY INVOLVING ANOTHER ENTITY, WHICH COULD CAUSE ONE TO FEEL PLEASURE**⁸

⁸ Wierzbicka (1982) は、このタイプの *have a V* 構文が、主にオーストラリア英語（と一部のイギリス英語）にのみ見られ、アメリカ英語の母語話者に許容されるのは稀であると指摘する：

have {a kick of the football / a throw of the boomerang / a read}

(cf. **have {a kill of the chicken(s) / a break of the window(s) / a torture of the prisoners / a draw of a horse / a build of a house / a sing of that song}*)

(Wierzbicka 1982: 777-778)

h. **SELF-DIRECTED ACTION WHICH COULD CAUSE ONE TO LOOK BETTER**

have {a wash / a shave}

(cf. **have {a dry / a quick powder / a quick make-up / a quick dress / a quick undress / a face-wash / a face-shave}*)

(Wierzbicka 1982: 779)

i. **JOINT BODILY ACTIVITY WHICH COULD CAUSE THE PEOPLE INVOLVED TO FEEL PLEASURE**

have {a kiss / a cuddle / a hug / a dance}

(cf. **have {a stroke / a quick powder / a quick make-up / a quick dress / a quick undress / a face-wash / a face-shave}*)

(Wierzbicka 1982: 779)

j. **JOINT SPEECH ACTIVITY WHICH COULD CAUSE THE PEOPLE INVOLVED TO FEEL PLEASURE**

have {a chat / a gossip / a laugh / a bitch / a grab / a yarn}

(cf. **have {a discuss / a converse / a consult / a thank / a greets / an interview}*)

(Wierzbicka 1982: 786)

Wierzbicka (1982) のこのような記述を見ると、目的語名詞は状態変化事象を表さず、繰り返し可能な行為を表すこと、特に、主語が表す主体が心地よさを感じるような行為を表すという 2 節で見た構文的特徴の傾向が読み取れる。

(18) の構文的意味は、*have a V* 構文に生起する目的語名詞に見られる意味の傾向を捉えたものと見ることができる。例えば、(18b) の名詞は知覚動詞を基体とするもの、(18h) では *wash* や *shave* などの身繕い動詞 (*grooming verb*) を基体とするものと一般化できる。ここに挙げられた各意味は、大なり小なり相互に関連してはいるものの、全てに共通する意味要素を挙げることは難しい。このことは、*have a V* 構文が家族的

This subtype of the *have a V* construction is restricted to a few dialects of English. It is rarely, if ever, allowed by native speakers of American English; but it is widely used in Australian English, and also well-attested in (some varieties of) British English, and therefore deserves to be described.
(Wierzbicka 1982: 777)

類似性 (family resemblance) を有する構文ネットワークを成していることを示唆する。

さて、このような構文記述を俯瞰して見た時、1つの疑問が生じる。それは、(18) のような意味的特徴がこの動詞だけに特有の特徴なのか、他の動詞にも共通する軽動詞構文全体に見られる特徴なのかという点である。この疑問への答えは、**have** とそれ以外の軽動詞とで、共起する目的語名詞のタイプを比較さえすれば、自ずと明らかになるだろう。このような観点から軽動詞の比較を行った重要な研究として、Live (1973), Akimoto (1989), 相沢 (1999) が挙げられる。以下では、相沢 (1999) の研究成果を中心に検討する。

相沢 (1999) は、**have, take, give, make** を中心に、様々な軽動詞がどのような名詞を目的語にとるのかについて、詳細に検討している。以下ではその概要をまとめる。相沢 (1999) で与えられている名詞の意味特徴と、名詞の具体例の一部を抜粋し、(I) から順に列挙する。なお、「その他」に分類されるものについては、列挙された項目とその内容を踏まえて、分類の名称に一部変更を加えている。

◆**have** と結びつく名詞

(I) 自分の身体動作 (例 : **laugh, smoke, swallow, bite, look, peek, bath, smell, sniff, run, walk**)

(19) We had a good *laugh* together. (相沢 1999: 60)

(II) ことばによる相互活動 (例 : **chat, debate, talk, argument, comment, discussion, joke**)

(20) I wonder if you would mind if we had a little private *chat* with our Cathie. (相沢 1999: 63)

(III) 知的状態・感情 (例 : **doubt, fear, hold, belief, conception, grasp, understanding, guess, love, liking, admiration, dislike, hatred, resentment**)

(21) He had a firm *hold* on me through knowledge of my identity. (相沢 1999: 64)

(IV) 自分の意思表示 (例 : **intention, thought, objection, fight, quarrel, regrets, try**)

(22) Helen had no *desire* for that kind of life. (相沢 1999: 65)

(V) その他

(23) a. 経験 : I had *success* in trading. (相沢 1999: 66)

- b. 無意志的事態⁹ : The car had a *breakdown*. (相沢 1999: 67)
- c. 受動的意味 : We had a visit from our aunt. (= Our aunt visited us.) (相沢 1999: 67)

◆take と結びつく名詞

(I) 身体動作 (例 : ride, step, puff, swallow, pull, stumble ; ほか have と共通の名詞)

- (24) Bob let me take a *puff* of his cigarette. (相沢 1999: 80)

(II) 意志的行為 (例 : action, aim, care of, command, notice, turn, shelter, risk, vow, recess)

- (25) He should take legal *action* against them. (相沢 1999: 82)

(III) その他

- (26) a. 自然発生的変化 (例 : curve, hold, shape, root, liking, precedence)

The car took a sharp curve to the right. (相沢 1999: 83)

- b. 受動的意味 (例 : alarm, blame, offense, punishment, warning, delivery, fright)

take delivery of, take fright (相沢 1999: 84)

◆give₁ (二重他動詞用法) と結びつく名詞

(I) 他者へ働きかける身体動作 (接触行為)

- (27) a. 身体接触 (例 : embrace, hug, squeeze, kiss, handshake, touch, clap, chuck, stroke)

She gave the door another *push*. (相沢 1999: 51)

- b. (打撃的) 身体接触 (例 : slap, smack, punch, thump, kick, beating, whack, lash)

He gave me a *slap* on the back and said "Good job!" (Merriam Webster's)

- c. 物の形状変化 (例 : bite, sting, press, stir, stretch, twist, wring)

He gave my wrist a violent *twist*. (『新編英和活用大辞典』)

- d. 物の位置変化 (例 : heave, push, shove, thrust, screw, shuffle, spin, turn, flip, toss)

I gave him a hard *push*. (『新編英和活用大辞典』)

- e. 表面操作 (きれいにする) (例 : bath, shave, clean, sweep, polish, rub, wipe, wash)

⁹ 相沢 (1999: 67) では「無生物主語」という名称が付けられているグループである。ここでは出来事に関する特徴に基づいて「無意志的事態」とした。(23) の例は、主体がいずれも行為の受け手、事態の受影者 (affected) となることで共通している。

I gave the table a quick wipe. (Merriam Webster's)

f. 視線移動 (例 : glance, glare, look, stare, wink, nod, smile, wave)

He gave me a sharp look with his flashing eyes. (『新編英和活用大辞典』)

(II) 他者への感情の伝達 (例 : fright, satisfaction, relief, surprise, shock, trouble, pleasure)

(28) The medicine will soon give you *relief* from pain. (相沢 1999: 54)

(III) 他者への情報伝達、知的行為 (例 : talk, reply, instruction, warning, proof, think, thought)

(29) I gave the whole situation a big *think* for about two seconds. (相沢 1999: 56)

(IV) (他者への) 意志伝達 (例 : encouragement, reassurance, miss, refusal, try, assent, help)

(30) She gave (us) a flat *denial* to the rumour. (相沢 1999: 59)

◆give₂ (単純他動詞用法) と結びつく名詞

(I) 生物による音などの放出 (例 : gasp, cry, sigh, snarl, yell, mumble, bark, grin, bark)

(31) She gave a little involuntary *gasp*. (相沢 1999: 45)

(II) 生物による身体動作、表情 (例 : bow, nod, shake, beat, scratch, frown, smile, shudder)

(32) 'Yes' I said eventually and gave a *nod*. (相沢 1999: 46)

(III) 無生物による音・光・動きなどの発生 (例 : smell, glow, crack, jolt)

(33) The moss gives (off / out) a silvery *glow*. (相沢 1999: 46)

◆make と結びつく名詞

(I) (身体) 動作

(34) a. 出現・退去 (例 : exit, entrance, escape, approach, stop, sail, move)

I made my *exit* as discreetly as possible. (相沢 1999: 69)

b. 攻撃 (例 : stab, arrest, attack, descent, swoop, grab, snatch)

One could make a *stab* at Greg's back. (相沢 1999: 70)

c. 急激な動作 (例 : move, rush, dash, splash, leap, haste, spurt, dive)

Tom's aunt made a *move* to the front door. (相沢 1999: 71)

d. その他の動作 (例 : detour, flight, tour, call, visit, bow, catch, reach, ascent, descent)

He has made three *flights* into space. (『新編英和活用大辞典』)

(II) 知的活動など (例 : discovery, mistake, summary, prediction, guess, review, estimate, error)

(35) We can only make *guesses* about it on the basis of samples of performance.

(相沢 1999: 72)

(III) (ことばによる) 伝達活動 (例 : remark, statement, suggestion, excuse, call, show, display)

(36) Mr. Clinton made a live *statement* on CNN. (相沢 1999: 73)

(IV) 意志行為

(37) a. 自分の意志行為 (例 : attempt, resolve, bet, achievement, success, appeal, denial)

Recently, successful *attempts* have been made to unify three of the four categories of force.

(相沢 1999: 75)

b. 他者に対する意志行為 (例 : appeal, claim, request, demand, attack, charge, denial)

Greg made no *objection* to being taken home and left. (相沢 1999: 74)

(V) 関係表示など (例 : improvements, progress, recovery, alternation, comparison) ¹⁰

(38) I never expected Nikki to make such good *progress*. (相沢 1999: 77)

以上のように、相沢 (1999) は、have, take, give, make の 4 つの軽動詞それぞれと結びつく名詞を意味的に分類したうえで、詳細に記述している。また、相沢 (1999: 87) では、結びつく名詞の意味タイプについて、4 つの軽動詞を比較した表を挙げている (該当する項目には代表的な名詞が挙げられている)。上記の記述に合わせて一部表記を変更したものを、表 1 として挙げる。

¹⁰ 相沢 (1999) で「関係表示」とされる名詞類だが、comparison, improvement など、異なる状態の関係性や比較が関わる概念を表す名詞が多い。しかし、それ以外にも payment, deposit などの名詞もこの分類に含められており、かなり雑多なグループであるという印象を受ける。

名詞が表す意味内容	<i>have</i>	<i>take</i>	<i>give</i> ₁	<i>give</i> ₂	<i>make</i>
口頭行為	cough	—	—	cry	—
身体 動作（自身）	walk	stroll	—	nod	rush
動作（他者へ）	—	punch	kick	—	stab
動作 飲食	drink	gulp	—	—	—
感覚	taste	sniff	look	smell	—
知的活動、状態	belief	—	—	—	search
情報 自身・相互	debate	—	—	—	remark
伝達 他者へ	—	—	advice	—	answer
感情 自身の	fear	—	—	—	—
他者へ	—	—	offense	—	—
意志 自身	hope	care	help	—	attempt
他者へ	—	—	—	—	offer
関係	—	—	—	—	advance

表 1 各動詞と結びつく名詞の意味内容（相沢 1999: 87-88, 表記を一部変更）

4 英語軽動詞構文への動詞中心的アプローチとその問題点

英語の軽動詞構文に関して様々な観点から研究が積み重ねられてきたが、これまでの先行研究の特徴として、動詞を中心に考察が行われているという点で挙げられる。上で見た Wierzbicka (1982) や Dixon (1991/2005) の考察でも明らかなように、*have* や *give*, *take* といった特定の動詞を取り上げ、それらと共に起しうる名詞の特徴や構文的特徴を考察するといった方法がこれまでの研究で大勢を占めている。このような研究手法・アプローチを、本稿では「動詞中心的アプローチ (Verb-centered approach)」と呼ぶことにする。

動詞中心的アプローチは、一見すると、軽動詞構文の役割が「軽い」という考え方と相反する立場のように思える。なぜなら、個別の動詞ごとに構文の特徴を記述していくことで、各軽動詞が構文においてどのような役割を果たすのか、その意味的な重要性を考えることになるからである。例えば、Wierzbicka (1982) では、軽動詞構文としての *have a V* 構文の多義を見事に体系的に記述しているが、そこで特定された 10 個の個別義は、目的語である *a V* の意味だけでなく、主体が何らかの繰り返し可能な行為を「経験する」(action seen as repeatable experiencer involving only one core participant) という動詞 *have* のもつ意味にも動機づけられるとしている (Wierzbicka 1982: 788-791)。つまり、(Wierzbicka 自身は *light verb* という名称を用いていないが)「軽動詞」という名に反して、動詞 *have* が構文全体の解釈に寄与していると述べていることになる。

これは必然的な帰結であると考えられる。ある特定の動詞を含む構文の特徴を記述し、最後に全ての特徴を俯瞰して見たとき、なぜその特徴がその特定の動詞を含む構文に存在するのかを考えれば、自ずと動詞の役割に目が向くだろうからである。実際、伝統文法の時代から、文の主動詞が何らかの役割を果たす記述も散見されるし、近年では、動詞の役割を強調する研究も数多く見られるようになっている。そこで、本節では軽動詞構文において動詞のもつ役割の重要性を主張する研究をいくつか概観し、動詞中心のアプローチについて検討したい。

4.1 軽動詞構文における動詞の意味の重要性

英語の軽動詞構文に関する近年の研究では、主動詞である軽動詞が、構文の事象構造と項構造の特性の決定に重要な役割を果たしていると明言する研究も少なくない (Butt 1995, 2010, Newman 1996, Brugman 2001, Folli et al. 2005, Wittenberg et al. 2014a, b, Bruening 2016)。特に、Bruening (2016) はいくつかの証拠に基づいて、軽動詞は本動詞と同じ語であり、また目的語名詞も一般的な名詞に過ぎないという主張を展開している。その根拠の 1 つが、Butt (2010) による類型論的調査において、軽動詞用法と本動詞用法とで形式的に異なる言語がないという事実である。軽動詞が本動詞と形式が変わらないのであれば、それは本動詞の用法の 1 つであると述べている (関連する指摘として、Huddleston and Pullum 2002: 291 も参照)。また、次の例の a pat、a kick のような出来事名詞は、目的語位置以外にも生起できることから、特殊な名詞などではなく、一般的な名詞に過ぎないと指摘する。

- (39) a. She gave him {a pat on the back / a kick in the teeth}. [light verb]
b. A pat on the back is better than a kick in the teeth. [non-light verb]
(Bruening 2016: 52)

(a) の軽動詞構文の例と同様、(b) のように pat、kick の出来事解釈がそれ以外の構文でも可能なことから、これらの名詞は軽動詞構文に特有の特殊な名詞なのではなく、一般的な名詞であると主張する。

軽動詞が本動詞の用法の 1 つとする 3 つ目の根拠として、対応する単純動詞文による言い換えが成立しない場合がある点が挙げられている。

(40) a. We took a well-earned rest.

* We rested well-earnedly. (Huddleston and Pullum 2002: 291)

b. He is taking another of his seemingly frequent showers.

* He is showering again seemingly frequently. (Bruening 2016: 53)

(40) は、名詞修飾の形容詞が、動詞修飾の副詞と意味的に対応せず、副詞の場合には非文となることを示している。また、Bruening (2016: 54) では、軽動詞構文において副詞修飾と形容詞修飾による複数の修飾要素が両立する場合、対応する単純動詞文では複数の修飾要素が両立しない例を示し、軽動詞と名詞が一つの複雑述語として一つの事象を表すのではないこと、すなわち、目的語名詞が表す事象が動詞の事象と異なるとしている。

(41) a. The man's wings slowly gave a quick flap.

* The man's wings slowly flapped quickly.

b. She deliberately put the accidental blame for the accident on Johnson.

* She deliberately accidentally blamed Johnson for the accident.

(Bruening: 2016: 54)

(41) の事実は、軽動詞構文と対応する単純動詞文が意味解釈上は近似するものの、実際には両者は異なる出来事を表すこと、すなわち、異なる事象構造を有することを示唆している。

(40)、(41) が指し示すのは、軽動詞構文では成立する意味解釈が、対応する単純動詞文では容認されないという点である。これに対して、2 節で観察した、完結的な事象解釈をもたらす修飾語句が生起できないという (4) や長時間の行為を表す事ができない (9) は、対応する単純動詞文で成立する意味解釈が、対応する軽動詞構文では非文となる例と言える。これらの事実から、Bruening (2016) などが主張するように、軽動詞構文と単純動詞文は異なる特徴をもつ別個の構文であると結論づけることができる。このことは、軽動詞構文が、構文特有の特性を有していることを示している。

軽動詞構文が構文特有の形式的・意味的特徴を有しているとする、それでは、述語である軽動詞はどのような意味的貢献を果たしていると言えるのだろうか。Brugman (2001) や Bruening (2016) に共通する主張は、軽動詞が文が表す出来事の骨組みとなる意味構造を

提供しているという点である。Bruening (2016) は、構文の項構造が目的語名詞ではなく、述語である軽動詞によって決まると述べる。例えば、同じ名詞であっても、動詞が異なれば異なる構文パターンをとる。

(42) a. * She gave a punch at him.

b. She gave him a punch.

(43) a. She took a punch at him.

b. * She took him a punch.

(Bruening 2016: 56)

(42b) は、一見すると動詞 *take* の項構造に反すると思われるかもしれない。なぜなら、*She took him a drink* のように、*take* は二重目的語構文に生起できるからである。むしろ、(42b) の振る舞いは、(43) のような抽象的移動を表す場合の振る舞いと合致する。

(44) * She took him {a moment / the responsibility / dictation / a memo}.

(Bruening 2016: 56, 一部表記を変更)

つまり、*take a punch* は、*take* の多義的な用法の 1 つをベースとしており、この抽象的移動を表す *take* によって項構造が決まっていると Bruening (2016) は主張している。

他にも、Wittenberg et al. (2014a, b) は軽動詞と一般動詞は同じ統語構造をもつと考えており、Newman (1996) も軽動詞が意味役割を決めることを示している。Foli et al. (2005) は部分的にでも軽動詞がアスペクト特性を決めると述べている。

4.2 動詞中心的アプローチの課題

Jespersen (1942) に代表される伝統文法が軽動詞の意味の「軽さ」を前提としてきたのに対して、近年の動詞中心的アプローチは、軽動詞の意味の重要性を強調してきた。Bruening (2016) に至っては、軽動詞用法が本動詞用法と変わりがなく、全く同じものであるという論調を展開している。しかし、はたして本当にそう言い切ってしまうのだろうか。以下では、動詞中心的アプローチで見過ごされている課題を 2 つ指摘する。

1 つは、特殊な解釈が生じる場合である。既に、相沢 (1999) の (23c) の観察で、軽動詞構文が意味的に単純動詞の能動文ではなく、その受動文に対応することを見た。この受動の意味をもつ軽動詞構文の存在は、様々な先行研究で指摘されてきた (Brugman 2001: 568, Dixon 2005: 466-467, Bruening 2016: 57)。以下に (23c) を再掲し、類例を追加しておく。

- (45) a. We had a visit from our aunt. (= (23c))
 b. Jan took {a kick / a beating} from Robin. (Brugman 2001: 566)

他にも、(46) のように使役文に対応する意味を表す場合 (Cattell 1984: 77-78, Dixon 2005: 466, 植田 2021) や、さらには (47) のように相互行為文に対応する場合もある。

- (46) a. I gave Mary a lick of my lollipop. (Dixon 2005: 466)
 b. People stepped out of my way to give me my look at her. (植田 2021: 10)
 (47) a. Shapatish and I exchanged a smile. (COCA, 2016 FIC)
 b. Sharon and Larry, Jr. trade a look. (COCA, 2001 FIC)

(46) では、「飴を舐めさせてあげた」「彼女を見させてあげる」といった使役の意味、(47) では「お互いにお笑いあった」「見あった、視線を送りあった」とった相互行為の意味を表している。(45) から (47) の例は、前節までで見てきたような能動文に対応する意味とは異なる。なぜそのような意味を表せるのだろうか。

この問題の奥深さを示すさらなる例として、Brugman (2001) の挙げる次の対比が興味深い。

- (48) a. The bomber took a hit.
 b. The bomber took a reading. (Brugman 2001: 567)

(48a) では「爆撃機が攻撃を受けた」、(48b) では「爆撃機(の乗組員)が測定を行った」のように全く異なる意味を表す。Brugman (2001) によると、このように前者が受動的解釈、後者が能動的解釈しか許されず、逆は許されないという。これはなぜであろうか。この問いは、動詞中心のアプローチにとって問題となる。彼らが主張するように、もし本動詞の意味と軽動詞の意味と

が同じであるとすれば、(48) がなぜ異なる事態を表すのかが説明できないからである。さらに、Brugman (2001: 568) は、take a spill(こぼす)が take a dive と異なり非意図的な行為を表すことも、本動詞 take の意味からは予測できないだろうと述べている。

このように、同じ動詞が能動文以外に受動文、使役文、相互行為文としての解釈を許すだけでなく、後続の名詞によってその解釈が 1 つに決まるのである。これらの振る舞いは、軽動詞が本動詞用法の 1 つに過ぎないとする考え方に反するように思われる。なぜなら、軽動詞と本動詞が本当に同じものなら、複数の解釈が成立するはずだからである。だが、実際はそうではない。

動詞中心のアプローチのもう 1 つの課題として挙げられるのは、記述された様々な意味に関して、なぜその動詞が可能なのかという点である。これまでの研究では、例えばどういった目的語名詞と共起できるかについて、個別の動詞の意味、つまり各動詞の(抽象的な)意味によって説明が与えられる傾向にあった。しかし、相沢 (1999) をはじめとする軽動詞の比較を行った研究では、例えば have や take など、複数の軽動詞で同じような意味を表す場合があることが指摘されている。

また、Kogusuri (2024a) や小葉 (2025) では、a look を目的語とする動詞で文全体が look にあたる視覚行為を表す例、すなわち軽動詞用法として使われている場合を COCA を用いて調査し、動詞の意味に関していくつかのパターンが成り立つことを明らかにしている。例えば、「何かを見る」という能動的解釈となる動詞には、give 以外に fire や dart のような使役移動動詞や catch や grab のような獲得動詞が見られる。

- (49) a. “But he’s obviously the man you e-mailed.” *She fired a look* at Ashley.
(2012, FIC, COCA)
- b. “Don’t come closer!” The cop drew his gun anyway. *John darted a look* at the girl.
(2008, FIC, COCA)
- (50) a. Alice strained to *catch a look* at it ... (2019, FIC, COCA)
- b. Without ever doing anything as obvious as turning around to *grab a look*, he is constantly taking Draiken’s measure, calculating his distance, ... (2019, FIC, COCA)

どういった意味の動詞と共起すると文全体が目的語名詞の出来事として解釈されるのかという観点、すなわちどの動詞であれば「軽動詞性」を持ちうるのかと問いは、動

詞の意味的な「軽さ」という定義を破棄する代わりに、なぜある名詞に対してそのような意味の動詞が生起しうるのかを説明を試みることにつながる。つまり、3 節で見た先行研究の成果に対して、「なぜそうなのか」を問いかけるアプローチとなる。これは、軽動詞を相対的に捉え、動詞の意味が名詞の意味とどのように協働して 1 つの出来事を描き出すのかということを探求することを目指すものである。このように個別の動詞の考察から、複数の動詞へと考察対象を広げることで、軽動詞構文がもつ構文的特性とは何であるのか、という本質的な問いに迫ることができると考えられる。

5 結論

以上、本稿では、英語の軽動詞構文に関する先行研究を外観し、その要点と課題を検討してきた。特に、これまで明らかにされてきた英語の軽動詞構文一般の構文的特徴をまとめた後、各軽動詞ごとの個別の構文的特徴を整理し、そして、これまでの研究が動詞中心のアプローチであったこと、およびその課題について述べた。課題の 1 つは、同じ動詞でも名詞によって文解釈が異なることが予測できないこと、もう 1 つは、ある動詞がなぜ特定の名詞と生起し、なぜ特定の解釈になるのかが説明できないことを指摘した。

これらの課題を解決するためには、Kogusuri (2024a) や小葉 (2025) のような特定の名詞と共起しうる動詞を考察するという「名詞中心のアプローチ (Noun-centered approach)」が重要であると考えられる。このアプローチの詳細については、別稿にて論じることにする。

参考文献

- Akimoto, Minoji (1989) *A study of verbo-nominal structures in English*. Tokyo: Shinozaki Shorin.
- 相沢佳子 (1999) 『英語基本動詞の豊かな世界—名詞との結合にみる意味の拡大』 東京: 開拓社.
- Bruening, Benjamin (2016) Light verbs are just regular verbs. *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 22(1): 51-60.
- Brugman, Claudia (2001) Light verbs and polysemy. *Language Sciences* 23: 551-578.
- Butt, Miriam (1995) *The structure of complex predicates in Urdu*, Stanford : CSLI Publications.
- Butt, Miriam (2010) The light verb kungle: Still hacking away. In Mengistu Amberber, Brett Baker,

- and Mark Harvey (eds.) *Complex predicates in cross-linguistic perspectives on event structure*, 48-78, Cambridge : Cambridge University Press.
- Butt, Miriam and Aditi Lahiri (2013) Diachronic pertinacity of light verbs. *Lingua* 135: 7-29.
- Cattell, Ray (1984) *Composite predicates in English: Syntax and semantics* 17, Sydney/Orlando/Tokyo : Academic Press.
- Dixon, Robert M. W. (1991/2005) *A new approach to English grammar: On semantic principles*. Oxford: Oxford University Press.
- Folli, Raffaella, Heidi Harley, and Simin Karimi (2005) Determinants of event type in Persian complex predicates. *Lingua* 115(10): 1365–1401.
- 日高俊夫 (2007) 「「Give a ～」の意味構造と生成過程」『英米文学』51(2): 47-61, 関西学院大学英米文学会.
- 日高俊夫 (2023) 「英語の軽動詞関連形式における軽動詞性と構文性—give を主動詞とした文について—」岸本秀樹・臼杵岳・于一楽 (編)『構文形式と語彙情報』232–256, 東京: 開拓社.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge/New York: Cambridge University Press.
- Jespersen, Otto (1942) *A modern English grammar on historical principles, Part VI: Morphology*. London: George Allen and Unwin.
- 影山太郎 (1996)『動詞意味論』東京: くろしお出版.
- Kearns, Kate (1988/2002) Light verbs in English. ms., MIT.
- Kilby, David (1984) *Descriptive syntax and the English verb*. London: Croom Helm.
- 岸本秀樹 (2001) 「二重目的語構文」影山太郎 (編)『動詞の意味と構文』127-153, 東京: 大修館書店.
- Kogusuri, Tetsuya (2024a) Can heavy verbs be light verbs?: A constructional approach to the transitive V ... *Look* construction. *Tsukuba English Studies* 42: 73-96.
- Kogusuri, Tetsuya (2024b) Taking a look at V (NP) *a look* constructions: A frame-constructional analysis. The paper read at 13th International Conference on Construction Grammar.
- 小葉哲哉 (2025) 「get a look の語彙意味論—give a look との比較を通して—」眞野美穂・江口清子・小葉哲哉・于一楽 (編)『レキシコン研究の広がりと深まり』, 大阪: 大阪大学出版.

- Live, Anna H. (1973) The *take-have* phrasal in English. *Linguistics* 108: 41–66.
- Martínez Caro, Elena and Jorge Arús-Hita (2020) *Give* as a light verb. *Functions of Language* 27(3): 280-306.
- Newman, John (1996) *GIVE: A cognitive linguistic study*. Berlin and New York: De Gruyter Mouton.
- Norvig, Peter and George Lakoff (1987) Taking: A study in lexical network theory. *BLS* 23, 195-206.
- Poutsma, Hendrik (1926) *A grammar of Late Modern English, part II, section II*, Noordhoff, Groningen.
- Stein, Gabriele (1991) The phrasal verb type ‘to have a look’ in modern English. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching* 29(1): 1-29.
- 植田正暢 (2021) 「感情表出の表情・行為を表す二重目的語構文—再帰代名詞を伴う *allow/permit* の事例研究」金澤俊吾・柳朋宏・大谷直輝（編）『語法と理論との接続をめざして—英語の通時的・共時的広がりから考える 17 の論考』3-21, 東京: ひつじ書房.
- Wierzbicka, Anna (1982) Why can you *have a drink* when you can’t **have an eat*? *Language* 58: 753-799.
- Wittenberg, Eva, Ray Jackendoff, Gina Kuperberg, Martin Paczynski, and Heike Wiese (2014a) The processing and representation of light verb constructions. In Asaf Bacharach, Isabelle Roy, and Linnaea Stockall (eds.) *Structuring the argument: multidisciplinary research on verb argument structure*, 60-80, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Wittenberg, Eva, Martin Paczynski, Heike Wiese, Ray Jackendoff, and Gina Kuperberg (2014b) The difference between “giving a rose” and “giving a kiss”: Sustained neural activity to the light verb construction. *Journal of Memory and Language* 73: 31-42.

コーパス・辞書

- Corpus of Contemporary American English [COCA] <https://www.english-corpora.org/coca/>.
- 市川繁治郎（編）『新編 英和活用大辞典』東京: 研究社.
- Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary* (2008) MA.:Merriam-Webster.
- 南出康世（編）(2014) 『ジーニアス英和辞典第 5 版』東京: 大修館書店. [G⁵]